

緋のデスサイズ

八神大輔

第一話

その日、あたしはガチガチに緊張していた。

もちろん、ハンターズとして初めてラゲオル地表に降りる日だった、ということもある。訓練は十分に積んだとはいえ、地表には謎の怪生物 有り体に云えばモンスターだ がうようよしてるって話だし、そもそもパイオニアに何が起ったのか、まだなんにもわかかってはいないのだ。

けれど、あたしが緊張してる いや、正直に云おう、ビビってる本当の理由は、今、隣にいるひとのせいだ。これから共に命を預けて、死地に降りていかなければいけないはずのパーティメンバーが、あたしには何より怖かった。

さっきから何度も繰り返し返しているように、あたしはまた、そっと横目で彼女を伺ってみた。

彼女の職業はフォースだ。種族はヒューマン。だから、彼女はフォーマルということになる。

ちなみにあたしはニューマンのハンター、ハニョ十ル。ニューマンつてのは、説明不要だと思っけど、科学技術の結果生み出された人工生命体みたいなものだ。でも、それはあくまで起源の話であって、今では普通に親から子が生まれてくる。未だに根強い差別もないわけじゃないけど、それなりにうまくやってるし、ヒューマンとニューマンの結婚だって少ない訳じゃない。

……話がそれた。

それついでに云うと、ニューマンはやはりもとが人工物のせいか、それなりに美形が多い。自分で云うのもなんだけどね。

だけど、今、隣にいる彼女は、あたしなんて全然かすんでしまうような美貌の持ち主だった。うっん、単に綺麗というだけじゃない、なんというか、圧倒的な存在感を持っていたのだ。

やや暗い赤の衣装に身を包み、服と同じような色の髪をしている。華美ではないけれど、やはり艶やかとしか云いようがないその姿に少し気後れしながら、あたしは挨拶した。それに対して、彼女はあたしを興味なげに一瞥したあと、たった一言だけ名乗った。

「ルルージュです」

瞬間、あたしはぼかんと、バカみたいに口を開けていただろう。彼女の名前が意味するものが理解されるのに、たっぶり五秒はかかった。

ルルージュ！ このひとが緋の蠍のルルージュ!?

あたしみたいな新米ハンターでも、その名前は知っていた。フォースでありながら、禍々しい大鎌を愛用し、その戦いぶりは苛烈にして残酷。ある人は彼女には一片の慈悲もなく、むしろモンスターに同情したくなると云い、ある人は彼女の緋の装束は返り血が染みついたものだと云う。

魔女とも死神とも恐れられる最悪のフォーマル。そんなひとのいるチームに、あたしみたいな素人がこのこ現れるなんて！

このとき、さっさと尻尾を巻いて逃げ出してしまえばよかったのかもしれない。

だけど、それはあたしのプライドが許さなかった 訳じゃない。あたしは文字どおり固まってしまって、動けなくなっていたのだ。

そんなあたしを、彼女はそとと、完璧に無視し続けていた。追い返す訳でもなく、地表へ向かう訳でもない。ただあたしがここに来たときと全く同じ姿勢で、端然と立っていた。

しばらくしてやっとあたしの金縛りも解けたけれど、彼女の様子に変化はない。あたしが落ち着くのを待っていてくれた、なんて期待はしてなかったけど、このまま突っ立っていてもしょうがないだろう。

あたしは一生分の勇気を振り絞るつもりで、彼女に声をか

けた。

「あの……」

「……」

「えっと……降りないんですか？ 地表に……」

彼女はやはり私のほうを見ようともしない。ただ姿勢もそのままに、口を開いた。

「死にたければ、お先にどうぞ」

ハスキーないい声……なんて、感動してる場合じゃなかった。とりつく島がない、とはまさにこのことだ。

ひよっとして、今のは遠回し（でもないか）に「帰れ」と云われてるんだらうか。

あたしはがつくりと肩を落としたが、意外にも、彼女の言葉には続きがあった。

「あと一人はいないと、危険です」

あたしは恐怖も忘れて、思わずまじまじと彼女の横顔を見つめてしまった。

正直、意外だった。「緋の蠍のルルージュ」にはどうしても孤高のイメージが強く、パーティを重視しているとは予想だにできなかったからだ。

ということ、彼女はメンバーが集まるのを待っているのだろうか。

でも、申し訳ないけど、彼女の名前を見てわざわざこのチームにやってくる人がいるとは思えない。

そう、普通はチームのメンバーを確認してから参加するものなのだ。……あたし？ あたしは初めてだったから、つついっさりして……。

と、そのとき。シティ中枢からの転送装置の作動音がした。

え？ 誰か来た？

「お待ちせしました」

おっとりした声が響き、ギルド内の転送装置から駆けてくる人影が見えた。

涼しげな青い服に、青い髪。彼女もフォーマルだった。

その姿を認めると、ルルージュは返事もせず（もちろん、あたしに声をかけることもなく）、地表への転送装置に向かって歩き出した。慌てて後を追ったあたしも含めて、三人は転送装置前で合流を果たした。

「ごめんね、ルルージュ、遅くなって」

「あなたのルーズさには、もういい加減、慣らされましたわ」

「ごめんってば。……あら？」

ころころと鈴を鳴らすように笑う彼女は、呆気にとられているあたしに、やっと気がついた。

「今日は可愛い子が一緒なのね。珍しいじゃない。嬉しいな、私」

「間違つて迷い込んだんでしょ」

…… 凶星だ。

「そういうこと云うものじゃないわよ、ルルージュ。はじめまして、私は千鳥。よろしくね」

腰をかかめ気味にして、千鳥と名乗った彼女は、満面の笑顔で挨拶してくれた。ニューマンにしては背の低いあたしは、そうしてもらつてやっと視線が同じ高さになる。この二人が、ヒューマンの女性にしては背が高いということもあるけど……。

それにしても、これまでの会話からすると、この二人は顔なじみどころか、いつも一緒にパーティを組んでいるらしい。あのルルージュに相棒がいるということだけでも驚きだったが、それがこんな天真爛漫な女性だということがまた信じられなかった。

「は、はい、はじめまして。北都です、よろしく願います」

あたしがついしどろもどろになってしまうのを、千鳥は不思議そうに首を傾げて見た。そして、またしても顔中を笑顔にして見せた。

「あ、そっか。初めてなんだね、今日が。大丈夫だよ、そんなに緊張しなくても」

頭をぐりぐりと撫でられそうな勢いだった。あたしは緊張

している本当の理由を言い当てられなかったことにほっとしつつ、頷き返した。

「はいっ。頑張りますっ」

「だから、気楽に行こう」

「……行きますわよ」

あたしと千鳥の会話に痺れを切らしたのか、ルルージュが先に立って転送装置へ向かった。もっとも、彼女の氷のような表情からは、なんの変化も読みとれなかつただけだ。

「あ、待ってよ、ルルージュつたら。じゃ、行こうか、北都ちゃん」

「は、はいっ」

「もう、固いなあ」

そうして、あたしはハンターとして初めての一步を、踏み出したのだ。見知らぬ世界への期待より、パーティメンバーへの不安で胸をドキドキさせながら。

*

まず濃密な大気の匂いに、むせかえる思いだった。

宇宙船内に擬似的に作られた自然とは、明らかに違う。吹き渡る風、生い茂る緑、まといつく湿気、それらが、自分は生きた惑星の上にいるんだと、実感させてくれた。

唯一残念なのは、当たりの風景が毒々しいほどの鮮やかさを持っていただけだろうか。やはり生態系が侵されているのかも知れない。

「北都ちゃん、準備はいい？」

「は、はいっ」

いかにも物珍しそうにきよるきよるしているように見られただろうか。千鳥の声にあたしは慌てて装備を確認した。

そうだ、ぼんやりしている暇はない。今のパーティは、フォース二人にハンター一人。この場合、ハンターが前衛を勤めるのが当然だ。つまり、このあたしが。

緊張で手が震えるのを見つかりませんように、見つかっても怖がっていると思われませんように……そんなことを考えつつ、あたしは新品のハンドガン構えた。訓練の成果では、セイバーやソードより、あたしにはこっちのほうが相性がいいみたい。……だけど、前衛には不向きな武器だったろうか？

「あ、北都ちゃん、ハンドガンなんだ、よかった」

え？ よかった？

「どんな敵が相手でも、囲まれないように気をつけるのがいちばん大事だからね。そのことに注意して、援護よろしくね」

え？ え？ 援護？

そこでようやく、あたしは彼女たちの装備に気がついた。ルルージュは、噂通りの大鎌を携えている。見た目にも恐ろしいな装飾だ。ソウルイーター、というらしい。使うもの命までも削り取る魔性の武器、と云われている。

一方、千鳥が持っている武器は、ただのセイバーに思えた。

……柄の両端から、フォトンの刃が出ていることを除けば。

……ダブルセイバー!?!

「そう、お気に入りなの、これ」

云いながら、千鳥は軽くダブルセイバーを振り回した。ルルージュがうっとうしそうにそれを避けつつ、前へ踏み出す。「来ましたわ」

その視線の先には、鮫のように大きく避けた口と、熊のような体躯のモンスターがいた。あたしは訓練で得た知識を引っ張り出す。確かブーマとか呼ばれている奴だ。

あんな太い腕で殴られたら、ひとたまりもないんじゃないか……そんな戦慄とは無縁なように、二人のフォースは軽やかに進み出た。

「じゃあ、行くよ」

まさに舞でも舞うように軽やかな仕草で、千鳥がダブルセイバーを振るう。美しく弧を描くフォトンの輝きが、無情にもモンスターたちにダメージを与えていくのが嘘のようだ。

そして、ルルージュは。

「……！」
空気を裂く唸り声を発して、ソウルイーターが振られる。それは文字どおり、その軌跡にある命を刈り取る死神の鎌だった。彼女の何倍も質量がありそうなブーマたちが、たちまち倒れ伏していく。

千鳥の戦う姿は華麗だったが、ルルージュのそれは……美しかったけれど、やはり、怖かった。

その面からは相変わらず表情は読みとれない。ただ、かすかに頬が紅潮しているように見える。モンスターに刃を叩きつけるような戦いぶりは、静かな狂戦士を思わせた。

噂は、本当なのかも知れない。

あたしはそう思った。だけど。

彼女の戦い方は確かに怖かったけれど、それと同時に……なぜか、胸が切なくなつた。

的外れなことを云ってる、というのはわかつてる。でも本当に、鬼気迫るその姿は張りつめた糸のようで、心に迫るものがあったのだ。

「……北都ちゃん？」

「は……はい？」

名前を呼ばれて気がつくと、二人は少し離れたところに立っていた。もうこの一帯にモンスターの影はない。あたしは慌てて二人のいる場所に駆け寄った。

「大丈夫？ びっくりしちゃった？」

「いえ、その、大丈夫です」

千鳥が心配そうに眉を寄せて、あたしの顔を覗き込んでくる。

二人の戦う姿をぼーっと見ていたとは云えず、あたしは顔を赤くしてうつむくばかりだった。

けれど、そんなことはこの赤い魔女にはお見通しだったようだ。

「見ているだけでは、強くなりませんわ」

吐き捨てるでもなく、嫌みでもなく、助言でもなく……本当にただの独り言のように、ルルージュは呟いた。だから余計に、ぐさぐさつと、その言葉は心臓に突き刺さった。

「まあ、最初はしょうがないよね。私たちが調子に乗って進み過ぎちゃったし。次からは当てていこうね」

やはりこちらも相変わらずニコニコと、千鳥がフォロワーを入れてくれる。私はただ赤面して頷くだけだった。

こうして、あたしの初陣は、「前衛」のフォースに守られて、全くの役立たずで終わった。

*

パイオニア2に戻ったときは、疲労困憊の極みだった。

もちろん、あたし一人だけだ。ルルージュも千鳥も、涼しい顔をしている。千鳥が帽子の歪みを気にしているくらいだ。

「お疲れさま。どうだった？ 楽しかった？」

帽子に手を当てて直しながら、千鳥が聞いてくる。あたしたちの目的を考えれば、楽しかったかはないだろうと思ったが、つまらない突っ込みはやめておいた。

「はい、お世話になりました」

それは間違いなかつたので、あたしは素直に深々と頭を下げた。

「いいんだよ、気にしないで。最初はみんなそうだからね」

そうなのだろうか。千鳥はともかく、新米のルルージュがラッピー一匹にあたふたしている姿なんて、想像もつかない。

そんな疑問を抱いて視線を向けてみたが、やはりルルージュは端然と佇むのみで、無駄な口は挟まなかった。

「じゃあ、これから頑張るね。今日はほんとにありがとう」

対照的に終始友好的な千鳥は、あたしの手を握って、解散の挨拶を告げた。

あたしは彼女の顔を見つめ、そして、ルルージュの横顔を見
やった。

そして、思わず 自分でもあとになって不思議だったが
こう云っていた。

「あの……また、ご一緒させていただいて、いいですか？」

自分で云ってから、本気でびっくりする。

今日はたまたま迷い込んだ、ということと混せてもらった
が、次回からも同行させてもらえとは思えない。彼女たち
にしてみれば、あたしなんかと一緒に回ったって、足手まとい
にこそなれ、メリットはないだろう。

そう思ったから、千鳥の返事はあたしには信じられなかつ
た。

「うん、もちろん。楽しみにしてるね」

なんの迷いもなく、笑顔のまま彼女はこう答えたのだ。

そして、それより遙かにあたしを驚かせたのが

「ね、ルルージュ。また一緒にできるといいよね」

「随意に」

その一言だった。

あたしはまたしても、ルルージュの横顔をまじまじと見つめ
てしまった。

失礼は、承知していたけれど。

ただルルージュは、結局、最後まであたしのほうなんて見
ようとはしなかったのだ。

*

…… そうして、あたしは、パイオニア2でもかなりレアなギ
ルドカードをもらうことができた。

ひょっとしたらこれって、どんなレア武器より、力強いもの
なのかも知れない。これを見せれば、誰でもすぐに逃げ出す
だろう。

…… 悪評も、ついてくるかもしれないけど。

その考えが、なんだかすごく楽しいものに思えて、あたし
はその夜はぐっすり眠れた。

千鳥に聞かれた言葉を思い出す。
楽しかったか？ そうね、楽しかったかも……。

第二話

「やあああああつ!!」

気合いと共に、あたしはハンドガンの引き金を引いた。フォンの銃弾がブーマの体に叩き込まれ、耳障りな悲鳴を上げながらそいつは倒れた。

あたしはほっと息をつき、額の汗をぬぐう。このエリアにいたモンスターはあれが最後のはずだ。

「お疲れさま。だいぶ強くなつたね、北都ちゃん」

千鳥がやはり今日もニコニコとして、あたしに回復テクニク・レスタをかけてくれる。

「ありがとうございます。でも、まだまだです、あたしなんて」

お世辞でも褒められて嬉しかったから、笑顔であたしは頭を下げた。

でも、そんな気分は、たいてい一瞬で終わってしまうのだ。

「本当、まだまだですわ」

場の気温が、一気に二、三度下がった気がする。

恐る恐る目を向けると、緋の装束のフォーマルは大鎌を肩にかけ、やはり端然と立っていた。

「声をあげたところで、命中率が上がる訳でも、攻撃力が上がる訳でもありません。騒々しいだけですわ」

「……すみません」

「もう、ルルージュつら。気合いつて大事でしょう？」

「冷静でいるほうが大切ですよ」

確かに、あたしがつい声をあげてしまうのは、未だにモンスターと向き合うと、恐怖が先に立つからかもしれない。震える手を押さえるために、自分で自分に湯を入れていたのだ。

でも、そんなんじゃ、目の前の敵しか見えなくなる。事実、これまで何度も後ろがお留守になって、死にそうなる目にあっ

た。

だから、まず何よりバトルに慣れて、冷静さを保てるようになること。それが重要なんだ。

そうわかってきたから、ルルージュの言葉自体には、あたしは傷つかなかった。

ただ少し悲しかったのは、相変わらず彼女は、あたしのほうを見ようともしないということだった。

こうして一緒にパーティを組むのも、もう五回目になる。談笑するほど打ち解けるのを期待してはいないけど(そもそも千鳥とさえルルージュは必要以上あまり喋らない)、目を見て話すぐらいしてくれてもいいのに。

やっぱりあたしはお荷物で、迷惑だって思われてるんだろうか。もう来ないほうがいいのかな。

「……北都ちゃん？」

「え……あつ……」

気がつくのと、すぐそばで千鳥が心配そうにあたしの顔を覗き込んでいた。

あたしは無理矢理笑顔を浮かべて、顔を上げた。

「こ、ごめんなさい、ぼーっとしちゃって。さ、行きましょう」

「……」

ルルージュと千鳥が、顔を見合わせる。千鳥がほんの少し困ったような、悲しそうな表情をしているような気がした。

「帰りましょうか」

そう呟くと、あたしたちの返事も待たずにルルージュはリユーカーを唱え、シティへの転移ゲートを作った。さっさと中へ入ってしまうルルージュ。

やむを得ず、あたしたちもシティへ戻ることにした。もうこれでお別れだと、宣告されたような思いがした。

*

シティへ戻ると、もうルルージュの姿はなかった。居住区へすぐに戻ってしまったらしい。

挨拶もさせてもらえないなんて。あたしは小さくため息をついて、せめて千鳥に頭を下げた。

「ありがとうございました。いっぱい、お世話になって……嬉しかったです」

「え？ 北都ちゃん……」

「それじゃ……」

「あ、ちよ、ちよっと待ってよ、北都ちゃんってば」

踵を返そうとしたあたしの腕を慌てて掴んで、千鳥が引き留めた。

あたしはびっくりして振り返り、千鳥の顔を見てもう一度びっくりした。

彼女は、目に涙を浮かべていたからだ。

「ど、どうしたんですか？」

「怒っちゃった？ 北都ちゃん」

「え……？」

怒る？ あたしが？ 何を？

「ルルージュはいつもああだから、怒っちゃうのも無理ないんだけどね。でもね、悪気がある訳じゃないのよ、あれでも。ただ、口が悪いっていうか、人の気持ちにお構いなしっていうか、物の言い方を知らないっていうか」

……千鳥さん、フォローになってないです」

彼女が一所懸命なのはわかったが、あたしはつい笑ってしまった。

でも、その笑顔で千鳥も安心してくれたのか、やっといつものような笑顔を見せた。

「あはは、そつだね。ほんと、フォローしづらいコなんだ、あの「は」」

……ルルージュを「あの」呼ばわりできるこの人は、やっぱり大物なんだな、きつと。なんたってルルージュのパートナーなんだもの。

それに引き替え、あたしはなんなんだろ。

「北都ちゃん？」

また暗い顔になってしまったあたしに、千鳥は小首を傾げた。

あたしは精一杯卑屈にならないよう気をつけながら、苦い笑みを浮かべた。

「怒ったりしません。ルルージュさんの云ったこと、全部、ほんとだし」

「北都ちゃん……」

「だから、もう……あたしみたいな足手まといが、つきまったら……迷惑だと思って……」

ダメだ。泣きそうになる。これ以上、みともないところを見せたくない。

あたしは振り返って、その場を走って逃れようとした。

けれど、後ろからふわっと暖かくて、柔らかいものに抱き留められてしまった。

「え……」

あたしを抱きしめた千鳥は、優しい声で、囁いた。

「迷惑だったら、一緒に冒険したりしないよ」

「千鳥さん……」

「ルルージュじゃないけど、云わせてもらっちゃう。北都ちゃん、甘過ぎだよ。ハンターズをなめちゃいけないよ」

「え……」

抱きしめられた体勢のまま、あたしは首を後ろにそらせて千鳥の顔を見上げた。千鳥は優しいに、微笑んでいる。母親

って、こんな感じなんだろうか？

「命がけなんだから、ハンターズは。信用できない人とは、絶対に組めないよ」

「千鳥さん……」

「そしてね……そのことは、ルルージュがいちばんよく知っているの……」

「え……」

慈母のような笑みが、一瞬、深い悲嘆に彩られる。でも、それは本当に一刹那のことで、すぐに千鳥はいつものように、明るく、太陽のように微笑んでいた。

「だから、ルルージュはきついこと云うんだよ。わかってあげてね。」

「……はい。」

よくできました、という感じであたしの頭をぐりぐりと撫でて、千鳥は体を離れた。ぬくもりが遠ざかるのが、ちょっと残念な気がする。

「また一緒に、回ってくれるよね？」

その言葉に、またしてもあたしは泣きそうになってしまったので、思いつきり頭を下げた。

「ご迷惑じゃなければ、よろしくお願いします。」

「もう、迷惑じゃないって何度も云ってるのに。あ、そうだ、ついでにその丁寧な喋り方もやめようね。他人行儀じゃない。」

「え、でも……。」

「いいから。」

「……はい。」

「じゃないでしよう？」

「……うん。」

「よくできました。」

またぐりぐりと頭を撫でられる。やっぱりさっきのはそういう意図だったんだ。

でも、不思議と子供扱いされるとか、そんな感じじゃなかった。きつと千鳥流の親愛表現なんだろう。

ひよっとして、ルルージュもやられたことあるんだろうか？想像しただけで、あたしは吹き出してしまった。

訝しげな顔をする千鳥に首を振り、あたしは今日やっと、心から笑うことができた。

「もっともっと頑張って、強くなるね、あたし。いつまでもフォ

ースに前衛やってもらってる訳にいかないし。」

「その意気だよ。でも、私たちは好きで前衛やってるから、その点は気にしないでね。」

「え、そうなの？」

フォース二人組のチームだったから、やむなく前衛も兼ねているのだと思っていた。云われてみれば、この二人は最低限のテクニクしか使用しない。自ら望んで敵中に突っ込んでいく感じだ。

「でも、どうしてそんな危険なことを？」

あたしなんか心配するのはおこがましいとわかっているけど、フォースはやはり体力も防御力も低いから、肉弾戦はリスクが大きいはずだ。避けられる状況なら、避けるべきなんじゃないだろうか。

そう尋ねると、千鳥はまた少し悲しそうにうつむいた。

「これは私の勝手な推測だけど……。」

「……？」

「ルルージュは……自分を危険な場所に置くことを、罰だっで、思ってるのかも知れない……。」

「罰……？」

「……。」

「どついう……こと？」

けれど千鳥は、それ以上は答えてはくれなかった。ただ悲しげな微笑みのまま、小さく首を振った。

「これ以上は、私からは云えないな。いつか、ルルージュが話してくれるといいね。」

「……そうだね。」

そんな日が来ることは、正直、想像できなかつたが……プライベートなことを、本人の知らないところで詮索するのは気が引けた。

おそらくそれが、ルルージュの戦い方の理由なんだろう。彼女をあれほど激しく、強くさせる支え、そして同時に、危ういほど脆くさせる何か……。

ところで。

「じゃあ……千鳥は？」

「え？ 私？」

「そう。千鳥が前衛をやってる理由……それも内緒？」

「ああ。」

「にっこりと子供のような笑顔を浮かべる千鳥。

「私は、それが性に合ってるから。」

……誤魔化しているようには、聞こえなかった。

*

それでもやはり、その日、転送装置に入るのは勇気がいった。

千鳥はああ云ってくれたけど、ルルージュが本当のところ、どう思ってるのかはわからない。性懲りもなくまた来た、と思われたらどうしよう。

……だけど、自分でも不思議なのは、どうしてあたしはこんなに、彼女たちと一緒にいたいと思ってるんだらうってことだ。もうパーティは組めない、と考えたとき、泣きそうになったのはなぜなんだらう。

そりゃ千鳥はよくしてくれるけど、ルルージュの冷たさは、差し引きしても十分マイナスだ。……あたしってマゾ？

よくわかんないけど、なぜだか、あたしは彼女たちからもっと正確に云えばルルージュから、目が離せなくなっていたのだ。彼女が本当は何と戦っているのか、あたしは知りた

い。その理解不能な感覚に後押しされて、あたしは居住区からシテイへやってきた。

そこにはいつも通り、緋の装束の魔女が、端然と立っていた。

「……こんにちは」

側まで歩み寄り、挨拶する。いつものことだから、もう返

事も期待しない。

ところが、この日は違った。

「遅いですわ」

「……えっ？」

思い切りよく、顔を上げてしまう。ついとそらされたが、先ほどの一瞬、ルルージュはあたしのほうを見てはいなかったか？

「千鳥の悪い影響があるんじゃないやありませんこと。ルーズな方は、ひとりで十分ですわ」

「は……ごめんさい」

云いながら、あたしは今度も彼女の横顔をまじまじと見つめてしまった。

「遅い」と怒られるということは、あたしを待っていてくれたんだらうか？ そう考えていいのかな？

気を引き締めようと努力したけど、顔がほころんでしまうのを、どうしようもなかった。ルルージュはそんなあたしを気味悪がるでもなく、もちろん笑顔を見せてくれるでもなく、やっぱりいつも通り佇んでいた。

このとき、あたしは浮かれすぎてしまったのかも知れない。つつい調子に乗って、口数が多くなってしまった。

「今日のご迷惑かけないように、頑張りますね！」

「……」
「私も早くお一人みたいになりたいなあ。どうすればルルージュさんみたいに強くなれるんでしょう」

これまで、どんな状況でも、ルルージュの表情が変わることはなかった。常に少し愁いを含んだような、物憂げな様子。それがあたしの知るルルージュのすべてだった。

だけど、このとき。あたしの不用意な一言が、初めてルルージュに変化を与えた。

彼女は、笑ったのだ。

笑ったのだ……思う。

ただその笑みはあまりに……あまりに怖くて、あたしは歯の根が合わなくなつた。噂通りの「緋の蠍」が、そこにいた。「骨が軋むほど、誰かを憎いと思つたことがあつて？」

「……え……？」
「私は、この惑星で動いているものすべてが憎い。根絶やしにしてやりたいと思つていますわ」
「ルルージュ……」

だから、戦える。ためらいなく自らを死地にさらし、命を刈り取れることを喜びにできる。彼女はそう云いたいのだろうか。

再び表情を消して静かに立つ彼女は、暗い炎に身を包んでいるように見えた。

「お待ちせしました」

凍り付いた空気を、聞き慣れたのどかな声が破ってくれる。このときほど、千鳥の存在に感謝したことはなかった。

ルルージュは例のごとく、黙ってラグオルへの転送装置に向かつて歩き出す。

あたしはその後ろ姿を追いながら、さっきのルルージュの言葉を、その様子を思い出していた。

憎しみが、彼女を動かすすべてなのだろうか。違う。

理由はないけど、そう確信できた。彼女は憎しみで自分を鎧うことで、何かを守ろうとしている。

あたしはその「何か」を知りたい。彼女が死神の鎌を振るい続けるその理由を、あたしはどうしても知りたかった。

第三話

そうして、あたしたちはついに、その場所に辿り着いた。

セントラル・ドーム。

第一次植民計画の中心地。パイオニア1の人々はこの施設を中心に植民活動を行い、そしてそれは十分軌道に乗っていったはずなのだ。だからこそ、あたしたちはパイオニア2でこの地を訪れた。

だけど、あたしたちがこの惑星^{ほし}に到着したそのとき、セントラル・ドームと回線を開こうとしたまさにその瞬間に、原因不明の爆発が起こり、地上からの連絡は途絶えた。

不幸なことに、フロンティアを目的としたパイオニア1と違い、単純に移民のためだけに用意されたパイオニア2には、十分な軍隊が搭乗していなかった。船内 シティと呼ぶの治安維持がせいぜいの、警察に毛が生えた程度の部隊しかいなかったのだ。

そこで白羽の矢が立てられたのが、あたしたちハンターズだったというわけだ。

故郷では荒つぽい何でも屋として、ともすればならず者のように見られがちだったハンターズは、一躍脚光を浴びることになった。総督府の依頼を受け、ラグオル地表で何が起ったのか調べるために、たくさんのハンターたちが降りていった。

誰もが、英雄になりたかったのだと思う。あたしみたいに、子供っぽい憧れでハンターズになろうとする人々も増えた。

……だけど、その多くが帰ってこなかった。

ラグオルで何があったのかもわからないまま、いたずらに時間だけが過ぎ

そして、今。あたしたちは、セントラル・ドームの前に、立っているのだった。

「……………」

ルルージュが無口なのはいつもどおりだったが、引き結んだ唇に、やはり緊張しているのが感じ取れた。

いつも太陽のように笑う千鳥も、不安げに眉をひそめて、セントラル・ドームを見上げていた。

そして、あたしは 自分が今、ここに立っていることが信じられなくて、ぼかんと口を開けたままだった。

「……………行きますわよ」

先陣を切るのは、いつもルルージュだ。緊張はしていても、不安や怯えとは全く無縁な様子で、ルルージュはセントラル・ドームの扉に手をかけた。

「ちよ、ちよと待ってよ、ルルージュ」

慌てて千鳥が彼女を引き留める。ルルージュは少し苛立った風に眉をひそめて、千鳥を振り返った。

「なんですかの？」

「その……大丈夫かな〜と思って。メイトやフルイドもだいたい使っちゃったし……出直したほうがよくないかな〜」

「何を……………」

珍しく少し声を高くしかけたルルージュは、千鳥の視線に気づいて、言葉を止めた。

千鳥は、あたしを見ていた。気遣わしげな瞳の色。

そのことに気づいて、ルルージュは小さくため息をついた。ドアから手を放し、踵を返そうとする。

その姿を見たとき、あたしは思わず口を開いていた。

「行こう！」

「え……………ほ、北都ちゃん？」

千鳥が慌ててあたしを振り返る。ルルージュもちらりと一瞥した。

あたしは虚勢を張っているのがバレバレだと気づいていたけど、それでも無理矢理笑顔を浮かべた。

「せっかくここまで来たんだもん！ 次にまたここまで辿り着けるって保証はないんだよ？ シティの人たちも、ラグオルで何があったか知りたくて、ずっと不安に思ってる……。こんなところで足踏みしてる暇ないよ！」

「北都ちゃん……」

困惑顔で、千鳥はあたしとルルージュを交互に見た。

あたしは唇を噛みしめて、ルルージュを見つめた。

ルルージュはもうあたしを見ていない。セントラル・ドームのドアに、じっと視線を注いでいる。

……もし、ルルージュがそれでも帰ると云えば、これ以上反対する気はなかった。

あたしはルルージュの戦いを見届けることで、彼女が戦う理由を知りたかった。だから、あたしが足手まといになって、彼女が前へ進もうとするのを邪魔するのが耐えられなかった。

だけど、それが子供じみた意地だったこともわかってる。あたしのせいで、全員が危険な目に遭うかもしれない。ルルージュがそう判断したなら、それはやむを得ないことだと思っていた。

沈黙の時間は、どれぐらいあっただろうか。

やがて、ルルージュは呟いた。

「行きませうよ」

重く分厚いセントラル・ドームのドアを、ルルージュがゆっくり押し開ける。

千鳥はやはりまだ困ったような顔をしたまま、あたしを見て小首を傾げた。

「……無茶はダメだよ、北都ちゃん？」

「……うん」

頷いたあたしに、千鳥は優しく微笑んでくれた。

そうして、あたしたち三人は、セントラル・ドームへと踏み込んでいった。

*

非常用電源だけはかろうじて生きているのか、ドームの中は非常灯だけがぼんやり灯っていた。

生き物の気配は、まるでない。モンスターも 人間も。

あたしたちの足音だけが、気持ち悪いぐらい反響していた。

「誰も……いないね……」

「そうだね」

言わずもがなあたしの台詞に反応してくれるのは、当然、千鳥だけだ。ルルージュは無言で先頭に立ち、ドームの内부를調べていく。

最初に居住区を見たが、やはり誰もいなかった。こんなこと云うのはなんだけど 死体すら、なかった。

次に管制室へ向かった。だけど、そこでも収獲はゼロ。コンピュータを動かせる電力はなかったし、もし仮に電気系統が無事だったとしても、意味はなかったろう。コンピュータ類はどれも超高压の電流にさらされたように、焼け焦げていた。

「なんだか、作務的だね」

「ここに人がいた痕跡を……消してしまおうとしてるみたいだね……」

「……」

そのあと、各フロアを順次回って見たのだが、結局、なんの情報も得られはしなかった。いったい、どういうことだろう？ ここに来さえすれば、すべての真相がわかると思っていたのに……

このままにもわからなければ、あたしたちはどうなってしまうんだろう？ パイオニア2は、どこへ行けばいいの？

あたしは込み上げる不安に、叫び出したくなった。

それをぎりぎり抑えることができたのは、普段と全く変わらない二人のフォーマルのおかげだっただろう。

千鳥は「おかしいね」とか云いながら、いつもどおり二三

「こと微笑んでいる。ルルージュは落胆も焦りも知らぬげに、端然と歩いていく。その二人を見ていれば、何が起ころうと平気だと思えた。」

「上階から先に回ったあたしたちは、今、最下層のフロアにいた。あたしと千鳥が、顔を見合わせて肩をすくめる。」

「そのとき、何かに気づいたように、ルルージュが首を巡らした。」

「なあに、ルルージュ？ どうかしたの？」

「風が……ありましたわ」

「風？」

「問い返したあたしには答えず、ルルージュは通路の奥へ歩いていった。あたしと千鳥も、急いであとを追う。」

「見取り図によると、この先は、行き止まりになっていたはずだけど……」

「あたしたちが追いついたとき、ルルージュはやはり通路の端に立っていた。壁に手を当てて、何かを探っている。」

「どうしたの、ルルージュ？」

「……」

「やっぱりルルージュは答ええない。真剣な表情で、ルルージュはいつも眉間にしわを寄せているけど、壁を探り続け、やがて、カチツと小さな音がした。」

「そのままルルージュが壁を押し込む。すると、壁が向こう側に静かに開かれていった。」

「わわわっ」

「わ、びっくりだね」

「目を丸くして、あたしと千鳥はその奥を覗き込んだ。地下深く降りていく通路があるらしい。まだ舗装もされておらず、岩肌がむき出しになっていた。」

「なんなんだろう、これ……。どうして、こんなところに……？」

「しかも、わからないようにカモフラージュしてたつてところが、怪しいよね」

「……行ってみれば、わかりますわ」

「そう云ったときには、もうルルージュは歩き出していた。死神の大鎌を肩に担いだ、いつもと変わらない姿で。」

「あ、待ってよ、ルルージュったら」

「千鳥がばたばたとあとに続く。あたしもハンドガンを握り直しながら、闇の中へ進んでいった。」

*

突然、大きく開けた場所に出た。

「そこは非常に広大な広場のようになっていた。セントラル・ドームの地下に、こんな空洞があるなんて。」

「ただ、あたしたちが本当に驚いたのは、そんなことについてじゃなかったのだ。」

「な……なに、あれっ!？」

「あたしたちがこの広場に辿り着くと同時に、キシヤアアアというような、金切り声が響いた。強い風も吹き付けてくる。その羽ばたきで巻き起こる風だった。」

「広場の高い天井近くを飛び回るその姿は、で、でっかいトカゲ!!」

「トカゲに羽根はないと思うよ、北都ちゃん」

「じゃあ、じゃあ、なに、なんなの、あれ？」

「……ドラゴン」

「パニックを起こしたあたしに呆れるでもなく、落ち着かせようとするでもなく、やはり独り言のように、ルルージュは呟いた。」

「ドラゴン？ なんてそんなものがあるの？ メルヘンだよ、そんなの!」

「……理由は存じませんが」

「ひゅっ、と風を切る音を響かせ、ルルージュはソウルイターを振った。その音と、その刃の輝きに、あたしはほんの少し平静を取り戻した。」

「そこにいるのは現実ですわ。そして、あれを倒さないことは、前に進めないことも」

「倒すって……あれを!?」

「千鳥」

もうあたしの叫びは完全に無視して、ルルージュは千鳥に向き直った。

「あの手の相手には、これは不向きですわ」

そう云って、ソウルイーターを軽く掲げるルルージュ。千鳥が頷いた。

「フオロフに回りますわ」

「オッケー」

答えながら、千鳥はダブルセイバーを振り回した。

そうしている内に、ドラゴンが高度を下げた。着地しようとしている。

それを見てルルージュと千鳥は、一気に駆け出した。

あたしも、あとに続いて飛び出そうとした。そのとき。

「北都さん」

ルルージュが、振り返った。真っ直ぐにあたしを見て、呼びかける。そんなの、初めてだったかも知れない。だから、あたしは、思わず足を止めてしまった。

「見ていなさい」

「そ……そんな！」

「無茶しないって……約束したよね」

いつもどおり微笑みながら、千鳥も云う。

そうして、二人はいよいよ地上に降りたドラゴンに向かっていった。

確かに、あんなのにあたしなんか迂闊に近づいたら、一撃でやられちゃうかも知れない。だけど、だけど！

あたしは悔しさと情けなさで、全身が震えた。

ルルージュたちの言葉が悔しかったんじゃない。ドラゴンを見てすくみ上がっていた自分が、心底情けなかった。

ドラゴンは見かけによらず敏捷な動きで、ルルージュと千

鳥に迫る。二人は左右に散開し、氷雪系テクニク・ギバータを唱えた。氷の刃がドラゴンに突き刺さり、悲鳴を上げさせる。ドラゴンがひるんだ隙に、千鳥が近づいて、その足下にダブルセイバーの斬撃を叩き込んだ。その間も、ルルージュはテクニクを連発して、ドラゴンの注意を引きつけている。

「す……い……！」

あたしは今更ながら、感嘆のため息をついた。そのときだけは、悔しさも情けなさも忘れた。

この二人のコンビネーションにかかれれば、こんな凶体のでかいだけの怪物なんて、相手にもならないんじゃないか。

あたしのそんな楽観的な予想を裏付けるように、ドラゴンは首を地に垂れた。かなり弱っているように見えた。

「……！」

チャンス、とルルージュも考えたのだろうか。これまで距離を保ってテクニクを使っていたけど、ソウルイーターを振りかぶって、ドラゴンの正面に走り出た。

鎌を振り上げるルルージュの頬は、紅潮していた。いつか見た激しさと切なさを、あたしは思い出した。

そのとき、すっかり弱り切ったと思っていたドラゴンが、首をあげた。真正面にルルージュを捉え、おぞましい牙の並んだ口を大きく開く。その奥から、火焰が吹き出そうとしていた。

「……！」

「ルルージュ！」

すさまじい炎のプレスが、吐き出された。その炎に巻かれたのは、しかし、ルルージュではなかった。

「千鳥！」

大地に倒れたルルージュが、顔を上げて、悲鳴のような声を上げた。ルルージュのそんな声も、驚愕に目を見開いた顔も、あたしには初めてだった。

そう、間一髪のところまでルルージュを突き飛ばした千鳥が、代わりにドラゴンのプレスを浴びたのだ。

「千鳥！」

ルルージュが千鳥に駆け寄り、あたしも全力で走った。

「千鳥！ しっかりなさい、千鳥！」

「えへ……ごめん、へましちゃったね。」

ルルージュに抱きかかえられて、千鳥は微笑んだ。全身に火傷を負い、虫の息であっても、千鳥は、笑ってくれるのだ。

ルルージュは即座にレスタを唱えていたけれど、そんな応急処置でどうにかできるレベルではなかった。

「キシャアアアアアアア！」

あたしたちの背後で、ドラゴンが勝ち誇ったような叫びをあげる。

ルルージュは振り返り、ドラゴンを睨んだ。いつか見た、憎しみに燃える視線。

「北都さん」

「は、はいっ」

「千鳥を、頼みますわ」

ルルージュはあたしの腕に、千鳥を預けて立ち上がった。

ソウルイーターを構えるルルージュ。死神の大鎌が、怪しい輝きを放った。

「……！」

「ルルージュ！」

止める間もなく、ルルージュはドラゴンの懐に飛び込んでいった。大きく振りかぶった鎌を、ドラゴンの足下に叩き込む。

すると、あれだけ固そうに見えたドラゴンの体が、紙のように引き裂かれ、鮮血が吹き出した。

悲鳴を上げるドラゴンに、ルルージュは二度三度と斬撃を繰り返した。

「す……すこい……」

あたしは茫然とその姿を見ていた。ソウルイーターに、あれほどの威力があったなんて。

でも、だったらなぜルルージュは、最初、「不向き」だなんて云ったのだろうか？

「ダメ……ダメ……」

千鳥が、震える手で、あたしの袖を引いた。

「千鳥？ どうしたの、大丈夫？」

あたしが千鳥の顔を覗き込むと、千鳥は恐怖に震える表情をしていた。自分がどれだけ傷ついても、こんな怯えた顔をする事はなかったのに。

「北都ちゃん……ルルージュを止めて、お願い……！」

「え？ どうして？ だって、あんなに……」

「ダメなの……！ ソウルイーターの本当の力は……使っちゃダメ……、あの……死んじやう……！」

「ええっ!?」

涙ながらのその言葉に、あたしは驚いてルルージュを見た。

ルルージュの顔色は、蒼白を通り越して、土気色だった。

あたしは思い出ししていた。ソウルイーターの噂を。振るうもの命まで吸い取る魔性の鎌……！

それが、本当のことだったなんて……！

「お願い……北都ちゃん……！」

ルルージュがもう一度ソウルイーターを振りかぶる。しかし、もはやその大鎌を振る力もないのか、体勢が大きく揺らいだ。ドラゴンがさかさ首をルルージュに向け、再びブレスを吐こうとする。

その頭めがけて、あたしはハンドガンの引き金を弾いた！

あたしが与えたダメージは微々たるものだったが、ドラゴンの注意を引くことはできた。あたしは続けざまにフォートの弾丸を叩き込みながら、ドラゴンに向かって走った。

「北都さん!?」

ソウルイーターを支えに体を起こしながら、ルルージュが叫ぶ。

あたしも負けずに叫び返した。

「フォートします！」

「……」

もちろん、彼女が感謝の言葉なんて云うはずがない。

「だけど、そのとき。彼女は、笑ったのだ。あたしはそう思った。とても小さな笑みだったけれど、あたしは決して見逃さなかった。」

「そして、ルルージュは自分にレスタをかけて立ち上がると、気力を振り絞って、ソウルイーターを振り上げた……。」

*

メデイカルセンターから、あたしとルルージュは出てきた。千鳥を見舞ってきたところだったのだ。

文字通り満身創痍で、あたしたちはどうかドラゴンを倒した。そして、そのまま全員揃って、メデイカルセンターに直行したわけだ。

千鳥は、どうにか一命を取り留めた。ルルージュの応急処置が効いたのだろう。あたしときたらほんとに、おたおたしていただけだったんだから。

「なんのための後方支援だろうと思うと、またしても情けなさか込み上げてきたが、今はとにかく千鳥が助かった喜びで、胸がいつぱいだった。」

「よかったねー、ほんとに。一時はどうなるかと思ったけど……。」

「……。」

「しばらく入院だっというけど、後遺症とかの心配はなさそうだし。ほんと、よかったよー」

「……本当、余計な真似をしてくれたものですよ」

「……え……？」

「千鳥があんなバカげた真似をするなんて。見損ないましたわ」

「……。」

「そんな……！」

「なんてことを云うんだらう。千鳥は、ルルージュをかばって大げがをしたのに！」

あたしは頭に血が上って、ルルージュのその声が持つ響きに

気づかなかった。それは、いつもの独り言のように聞こえる言葉ではなく、感情をむき出しにした、吐き捨てるような呟きだったのに。

怒りに顔を赤くして、あたしはルルージュを振り仰いだ。

そして……見た。見てしまった。

ルルージュの頬を、流れる涙を。

ルルージュはいつもどおり、端然と佇んでいた。その表情にも、変化はない。

ただ涙だけが、静かに止めどなく、流れていた。

その静かさが、あたしの心を突き刺し、言葉さえ失わせた。

「誰かに守ってもらって……そして、ひとり残されるのがどんな気持ちか……あなたにわかる……？」

「……。」

答えられなかった。

茫然と見つめるあたしのほうを見ず、ルルージュは歩き出した。

涙をぬぐおうともせず、彼女はシティへの転送装置へ向かい、姿を消した。

あたしは最後まで言葉もなく、その背中を見守っていた。

*

あたしたちが見つけた地下への入り口は、思いがけないほど大規模な洞窟へと続いていた。

パイオニア1の人々の行方は、杳として知れない。

パイオニア2総督府は、調査の継続を、ハンターズギルドに要請した。

Phantasy Star Online Ver.2
'Story of Scarlet Sorceress' Episode I
"The Scarlet Death Scythe"
end

PDF版あとがき

本作品は、ぬいさんのお誕生日記念として企画したものです。
 登場人物は、みんな実在（というに変ですが）のキャラです。
 北都ちゃんはぬいさん、千鳥さんはBangさん、ルルージュは私のキャラです。第一話（公開時は「前編」でした）の時点で、実はすでにこの三人の中では北都ちゃんがいちばんレベル高くて、ルルージュがいちばんへぼへぼだったんですが、その差はほとんど開いていきました（笑）。ほんと、よくもまあ恥ずかしげもなくこんな設定にできたよなあって感じ。まあ、お話はお話ってことで……（笑）。
 構想的には、もっとたくさんのキャラが絡む割と大規模なお話なんです、最後まで書ききれるといいなあと思います。あまり期待せずにお待ちいただけると嬉しいですよ（笑）。
 ご感想など、いただければ幸いです。

八神大輔

初出

第一話	二〇〇一年九月八日
第二話	二〇〇一年九月一九日
第三話	二〇〇一年十月二二日